

今日マチ子 × 藤田貴大 × 原田郁子

— cocoon を作ると言う事—

—昨日までオーディションをやってたんですよね。何時ぐらいまでやってたんですか？

藤田 終わったのは8時前ぐらいかな。

今日 そうか、8時に発表だったんだ。

藤田 そうそう。そのあと韓国料理屋に行って、ずっと飲んでたっていう。

郁子 たぶん全員キムチくさいと思います。

藤田 青柳が韓国帰りでキム子の土産を買ってて、それを食べてスイッチが入ったんだと思う（笑）

—オーディションは何段階あったんですか？

藤田 まず320人ぐらいの人が応募してくれたんだけど、書類審査はしたくないから一次オーディションで全員来てもらったんですよ。一次で94人に絞ったんですわ。それで三次オーディションまでやって最終的に15人に絞りました。

—実際にはどういう審査を？

藤田 僕がオーディションって聞いてイメージするのはモーニング娘。とかなんだけど、いきなり「歌え」とか「演技しろ」って言うのはすごい嫌で、一次はインタビューしかしてなかったです。急な坂スタジオでやったんですけど、「ここに来る前に、朝、どこで起きたか？」を話してもらったんです。床に簡易的な地図を作って、起きた場所に自分でテープを貼ってもらって名前を書いてもらって。だから床に320個のてんがある状態です。

—「まいにちを朗読する」ってワークショップに近い形式ですね。

藤田 そうそう。で、別に演劇経験が豊かな人を取ろうとはしてなくて、ちゃんと僕と話せる人とか、話してるときの声が良い人を選んだ感じがあって。ほんとに、「この人、面白い」って人がいるんですね。やけに舌が長くて面白くない人もいるし。今日さんは一次にも来てくれたんだけど、「この人、面白いよね」って言う人が一緒だったのがほんと良かった。

今日 一次オーディションはほんとにすごかった。藤田君がずっと役者さんと話してるんだけど、履歴書も何も持たない状態で話を聞いて、終わったあとにワーツと思っ出して優勢をつける感じだったので。

郁子 やっぱ覚えてるんだ？ 良いなと思った人。

藤田 覚えてる。一次は本当に履歴書を持たずにやっていて、二次で初めてそれを見るんだけど、そうするとほぼ演劇経験に乏しい普通の人が残って。そうやって「話せる人」みたいなことで選んでいましたね。最後の三次のときは、僕が「ユリイカ」に書き下ろしているテキストを読んでもらったんだけど、そこにはマームとジプシーの役者さんもいたし、Z&Kさんもいたし、今日さんと郁子さんにも来てもらって。

郁子 生まれて初めてオーディションっていう場所に行きました。これまで全然縁がなかったから。ほんとに最後の最後、最終の人たちを絞ってる所に入ってるって全体を見ていた感じなんですけど……。とにかく空気の密度が濃過ぎて、3回ぐらいつァって倒れそうになって。

林 郁子さん、雨の中を外に出て行きましたもんね（笑）

郁子 そう。窓もないから、ひとりひとりが出たものがすごい充滿してて。

藤田 でも、何か——そうだ、3人で沖縄にも行ったんですよ。そのときにガマ（戦争中に防空壕として利用された洞窟）に入ったんですけど、そのときのプレッシャーがすごくて、中にいるとグーッと圧がかかっている状態なんだけど、外に出たら沖縄の風景が広がってる——その圧力からの抜けみたいなのが作りたい音だったり空間だったりするのかもしれないから、あのときに郁子さんが「出たい」って行ってくれたのは嬉しいかもしれない。

—沖縄に行ったのはどんな日程で？

藤田 えっとね、2泊3日。

郁子 2泊3日だけ？ 1週間ぐらい行ってるみたいだった。

藤田 あれ、ちょっと狂いそうだったよね（笑）大人の修学旅行って感じて、リゾート感ゼロだったんですよ。とにかく戦跡を行くっていう。今思うと、郁子さんって夜型だからつかったんじゃないかと思うんだけど（笑）

郁子 ……すごかった。でも、今まで何回も沖縄に行って、ライブしたりレコーディングしたり飲んだりしたけど、そのどの沖縄のどれとも違ってもヘヴィだった。

藤田 僕も「ワタシんち、通過。のち、ダイジェスト。」って作品の大案の次の日だから、めっちゃ飲んでたんですよ。それで飛行機の中でめっちゃくちゃ吐いて、げっそりして沖縄に着いたら先に郁子さんがいて、郁子さんもげっそりしてて。

郁子 ああ、そうだ。たしかみんな寝ないで早期の飛行機に乗ってきた。

藤田 で、着いてすぐ今日さんが『cocoon』を描くときに参考のために訪れていたひめゆり平和祈念資料館に行ったんですよ。ワゴン車とか借りてたから、最初はちょっと楽しい空気だったんだけど——別に僕は霊能力があるわけじゃないんだけど、ひめゆり平和記念資料館が近づいてくると「これはヤバい」って空気がわかるんですよ。そのとき郁子さんが黙りだして。

林 今日さんと『cocoon』の担当の金城さんは何度か行ってるから、やたらビビらせてきて。

今日 いや、泣いちゃう人もいるから、いちおう、かなり揺さぶられるということは言っておこうと思って。

郁子 ずっと避けてたんですよ。標識に「ひめゆり」って出ただけでそわつとすから、見ないようにしてたぐらい。だから、皆で沖縄に行こうってなったときも、ほんとにギリギリまで「くなればいい」と思ってた（笑）

—実際行ってみて、いかがでした？

郁子 1日にさ、全然心の準備がないときに、階段を降りたらガマがあってね。

藤田 あそこはヤバかった。

今日 「ひめゆり平和祈念資料館」からクルマでそう遠くないところにある。平和記念公園に行ったんですよ。

藤田 そここは資料館や平和の礎などが有名ですが、あまり観光地化されてないようなガマもあるんですよ。そこに入ったんだけど——郁子さんはちょっとなめたような靴を履いてきてたんですよ。

今日 ちょっと弱々しい靴ではあったよね。

藤田 郁子さんの靴は置いておいて（笑）それで僕と石井君が手を合わせて、先に入ったんですよ。そこは少年兵たちがいたガマだったんですよけど、そこに踏み入れてみたらすげえコウモリがいたんですよ。あそこが一番鳥立ったかもしれない。それで「郁子さん、ここすごいよ」って言ったら、郁子さんが立ち止まっちゃって。

郁子 歩も入れなかった。

今日 あそこはほんとに怖かった。私と金城さんは訪ねるのはもう3回目だったんですけど、行った途端におしゃべりをやめざるを得ないぐらい、「何かある」感がすごかった。

藤田 そこで郁子さんが「いっぱい目が見えた」とか言って。

郁子 お互いに聞こえたものをぼつぼつ話してたよね。

藤田 「今これが聞こえた」とか「これが見えた」とか、怖い話を和気藹々としてたよね。

今日 ほんとにね、誰かがいる感じがどうしてもの。

藤田 コウモリがいるだけなんだけど、そこから先に近づけない場所があるって感覚がして。だけども、人がたぐさん死んだ場所でもあるんだけど、そのまま進むとすごいきれいな海が広がってるんだよね。

そこからクルマに戻る途中に「コーラ飲みたくない？」って話をしたんですよ。ああ、これヤバいと思って。これが現代だと思った。アメリカの象徴みたいな飲み物を飲むものとして話を——。

郁子 でも、「そういうことも込みだよな」って話をしたわ。「今一番飲みたいのコーラだもんね」って。

藤田 そうそう。いくら怖い思いをしても戦時中になれるわけではないし、ここで何人死んだって言われてもやっぱり過去は過去なんですよね。そこに対して親身になれなくて、コーラを飲みたかったりビールを飲みたかったり、そういう今に生きてる自分もいて。でも、頭では死んだって事実はわかっているから、そうだし——何かその事実との距離がリアルだと思った感じはありましたね。

—今、海の話が出ましたけど、前に今日さんと藤田さんが対談したときも海の話をしてましたよね。沖縄の海はどうでしたか？

藤田 僕の住んでた北海道の海はもっと荒々しいし、ああいう透き通った水じゃないんですよ。沖縄は、海だけ見たら南国だって思うんだけど……とにかく残酷だと思ったんですよ。こんなにきれいな海まで頑張って逃げてきた子たちがここで飛び降りたってことは、とにかく残酷だなって思っ。その海が行き止まりだったら、何も救われないなと思った感じがありました。沖縄の海はとにかく綺麗だから。

今日 一緒に作るにあたって、私と藤田君とでは海の見え方がちよつと違うよねっていうところからスタートしていて。私は東京出身だから、海というのは街を川が流れていった先にある、どんづまりみたいなイメージがあるんですけど、藤田君が描く海は上京していくときの希望が描かれていて。

藤田 そう、僕は海に対して希望を抱いていて。でも、あえて引き合

マームとジプシー 8月公演

cocoon

憧れも、初戀も、爆撃も、死も。

原作：今日マチ子「cocoon」（秋田書店） 作・演出：藤田貴大 音楽：原田郁子

出演
青柳いづみ 伊東茄那 大岩さや 尾崎紅 尾崎桃子 川崎ゆり子 橋高佑奈 菊池明明（ナイロン100℃） 小泉まき（俳協/中野成樹+フランケンズ）
小宮一葉 中前夏来 鍋島久美子 難波有 長谷川洋子 的場裕美 山崎ルキノ（チルフィッシュ） 吉田彩乃 吉田聡子 李そじん
石井亮介 尾野島慎太郎

2013. 8. 5(月)→15(木)

5日(月) 19：00

6日(火) 19：00

7日(水) 15：00 / 19：00

8日(木) 15：00 / 19：00

9日(金) 19：00

10日(土) 15：00 / 19：00

11日(日) 15：00 / 19：00

12日(月) 休演日

13日(火) 19：00

14日(水) 15：00 / 19：00

15日(木) 15：00

※受付開始は開演の1時間前、開場は30分前になります。

会場 東京芸術劇場シアターイースト
〒171-0021 東京都豊島区西池袋1-8-1
*JR・東京メトロ・東武東上線・西武池袋線 池袋駅西口より徒歩2分
駅地下通路2b 出口と直結しています。
http://www.geikei.jp

マームとジプシー

藤田貴大の演劇作品を発表する団体として、2007年に設立。以降、1年に3〜4本の演劇作品を発表。象徴するシーンのリフレンを別の角度から見せる映画的手法が特徴であり、独特な手法は演劇のみならず、様々なジャンルの作家や批評家、観客から注目を受ける。2012年「かえりの合図、まっていた食卓、そこ、きつと、しおふる世界。」にて第56回岸田国士戯曲賞を受賞。作家である藤田は今日マチ子との共作漫画を発表し、2013年7月に単行本が秋田書店より発行予定。

今日マチ子「cocoon」（秋田書店）について

漫画家・今日マチ子の代表作ともいえる本作は、沖縄戦に動員された少女たちから着想を得て制作されたフィクションです。日本人のみならず、世界的な「記憶」である戦争の悲惨さや善悪ではなく、その時代に生きた少女たちの日常を丁寧に描いだし、歴史的な「事実」から紡ぎ出されたそれぞれの新しい「物語」を少女たちの目線で書き出しています。

舞台監督 森山香緒梨 照明 吉成陽子、富山貴之 音響 角田里枝、田鹿充 舞台美術・映像 細川浩伸 衣装 高橋愛 (suzukitakayuki) 音 Z&K 演出助手 沼田実子、小椋史子 チラシイラスト・劇中画 今日マチ子 ロゴデザイン 川名潤 (PriGraphics) 宣伝美術 本橋若子 制作 林香葉 特別協力 急な坂スタジオ 協力 株式会社秋田書店、有限会社トロピカル、suzukitakayuki、有限会社 i s、(株) クレセント、株式会社天然ロボット、株式会社キューブ、ナイロン100℃、俳協、中野成樹+フランケンズ、株式会社デュース、チルフィッシュ、フォセット・コンシェルジュ

主催・製作 | マームとジプシー 提携 | 東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団） 助成 |  **公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団** 一般社団法人私的録音補償金管理協会 sarah

公演延長決定!
公演期間を2013年8月5日~8月18日に延長されました。
詳細はwebサイトをご確認ください。

いつもと違う、
をプラスする。

いに出すけど、3月11日があったとき、僕はやっぱり水を描くことに慎重になったんです。でも、今日さんの描く水は美化されていないから、ああいうことがあったとしても強度が絶対あるなどと思っていて。だから水とが海に慎重になっている時期でも今日さんの本は開けたっていうことがあったんですね。あと、これは昨日も聴いてたんだけど、クラムボンがカバーしてる「波よせ」って曲があるですよ。地震があったあと、郁子さんはあの曲をどうやって歌うんだろうってずっと思ってた。

郁子 ずっと歌えなくてね。3月に地震があって5月からツアーがあったんだけど、初日の福島から東北をまわって。「波よせて 君は行く」って歌詞なんですけど、全然違う曲でたわかっていても、それを自分が歌うと皆の中にあの映像がもういっぱい戻ってくるのはわかっているから。もう一つ、THA BLUE HERB のB O S さんが一緒に作った曲があるんだけど、それも「抗えぬ波に 飲み込まれて行く」って歌い出して、これもしばらく歌えなくて。

藤田 2011年の7月のフジロックに僕は行って、グリーンの実後にはテントを立ててたんだけど、そのときグリーンにクラムボンが出てたんですよ。で、テントでコーヒー飲みながら聴いてたんだけど、そこでその2曲とも歌っていて。あの曲を郁子さんが歌えるのってすごいなと思った。

郁子 その日はハラカミさんのお葬式の日だったんだよね。当然、京都だから行けなかったんだけど、最後に「Folklore」って曲の中でそのことを自分なりにやって。そういう、あのライブには全部集まってたんだけど、それを藤田君は聴いてくれてたっていう。

藤田 海に関して言えば、いわきに滞在してたこともと作品をつくったとき、17歳の子が「海とかもう見たくない」って言うってたんだよね。それがすごいショックだった。僕は17歳の頃は「海を越え

たら上京できる」ってことしか考えてなくて。その「波よせて」って歌でもそれを言ってるんですよ。

郁子 「海の向こうに何がある？」ってもう何百回も歌ってるけど、いつも見えてくる風景はちがってる。ここにはないものがあるはず、って想像で渡っていくような。

藤田 僕にとって、海にはそういうイメージがあったんですね。だからいわきに行ったとき、僕は原発がどうかは正直よく知らないけど、17歳の子に「海見たくない」って言わせてるってどういうことなんだろうって怒りがあって。それは沖縄でもまったく同じことを思って。戦争反対とかはよくわからないけど、あの場所に行ったとき、当時の大人たちは16とか17の子どもたちに何て話を聴かせてたんだろうって怒りがあったんですよ。戦争のおそろしさとかは、いいんですよ。そうじゃなくて、その子たちが死ぬ瞬間に何の音も聴いてたのかがって考えると、すごい残酷な音ばかり聴いて死んでいったんだってことがわかる。だから、皆が帰ったあとに郁子さんと二人で3時間ぐらい飲んだときも「聴いて欲しい音ってあるよね」って話をずっとして。無惨に死んでいった子たちに聴かせたい音みたいなのがたぶんあるなと思っていて、それはたぶん郁子さんの歌だなって、今も全然思ってる。

—結構前の段階から、藤田さんは「今のマームは『cocoon』に向けて動いてる」と言っていましたよね。

藤田 もう、作品の中で何回海に走ったかわからないし、何回海を描いてきたかわからないけれど、それはやっぱり、2年後に『cocoon』を描くってことがどこかで念頭にあったので。

郁子 マームで『cocoon』を舞台化するって話は、『ユリイカ』の方

てくれたけど、『cocoon』の音楽をお願いしたいってことを今日言うべきかどうか、開演してからも悩んで。結局、その日は今日さんの本がどっ潰して、「一緒にやりたい」とは言えなかったんだけど。林 それで終演後、私から「ちょっと郁子さんに話があったかもしれないんですけど」って話を。それで、郁子さんはあんまりラーメンとか食べないのに一緒にラーメン屋に来てくれて、冷やし中華を頼んで笑ったよね（笑）。

郁子（笑）「とにかく読んでみてください」って藤田くんからそれだけ言われて、今日さんの『cocoon』を受け取って。何かとても大事なことなんだという気は伝わってきて。で、ラーメン屋のカウンターで、フェイント的に林さんにオファーをいただきました。とにかくうれしかったのと、身がひきまされるような、全身の毛が逆立つような恐ろしさが、両方あった。

—『cocoon』を舞台化すると発表したとき、藤田さんはツイッターで「音について、一緒に考えます」とつぶやいてましたよね。その言い方が印象的で。

藤田 今日さんとの「誰かさん」のとき、郁子さんが真っ先に言ってくれた感想がすごい嬉しくて。「風を感じた」って。たとえば、僕は「はだしのゲン」に風も音も感じないんですよ。でも、今日さんの絵は絶対風が吹いてるし、絶対音が流れてるって思わせてくれる。だから「これは音についての作品になるだろうな」ってことは、今日さんの絵を見た時にまずあって。それで郁子さんとの間わり方に関して、僕は単純に「歌ってください」ってオファーじゃ野蛮だと思ってたんですよ。もっと作品全体に流れる音を考えたいなってことがあって、そうつぶやいたんだと思う。

—ツイッターばかりで恐縮ですけど、郁子さんは『cocoon』に携わることについて「あたらしいことです」とつぶやいてましたね。それはやはり、普段とは違う音との関わり方にないそうなんですか？ 郁子 えっとね、初めてマームとジプシーを観たのは「Kと真夜中のほとりで」って作品なんですけど、それを観た時に「あたらしい言葉だ」思ったんですよ。そして、藤田くんは耳の良い人だな、と。ここぞ、という所でここぞ、という音がする。音のことをほんとに丁寧にやっているなあって。動かしたり繰り返したりしながら、立体的に“音楽”を鳴らしているというか。だから「あたらしい」というのは、自分の活動としてというより、「まだ誰も言ったことがない言い方」になるだろうってそう思ったんですよ。

—オーディションも終わって、これから具体的な制作に入っていくかと思うんですけど、どういう形で進めていくんですか？

藤田 今、メーリングリストがあって。たとえばこういう打ち合わせとかしたあと、郁子さんが家に帰ってシンセサイザーをガーツと鳴らした音を送ってくれたりするんですよ。一番怖かったのが、「ババババババ」って銃声にしか聴こえない音が送られてきて、「これはチェロだよ」みたいな文章が添えてあって。この人、こんなこと考えてたんだと思うと怖くなった（笑）

今日 皆びっくりしちゃって、誰も返信できなかったという（笑）

青柳 ほんと、誰も返信しなかったよね。

郁子 いきなりだったからね。シンと沈黙が訪れた（笑）

藤田 沖縄のときは一番怖がってそうだったのに、実は一番作品の中に突入してる感じが音に出た。そういうやりとりはもう生まれていて。

林 今日さんが以前、「『cocoon』を描き上げたとき、そこからそれぞれの『cocoon』が始まってくれたら嬉しいと思った」と言っていて、なるほどなって思ったんですよ。

今日 そう、だから別に原作に忠実である必要は全然なくて。描き終えても、自分が何を描いたのかは聴こえない音でわかっていないんですけど、それをまたさらに深めていくということを藤田君がやってくれればいいなと思ってます。

藤田 今、ユリイカに『cocoon』をテキストに起こしたものを発表してるんだけど、たぶん僕らも終わったあとに「これ、全然終わってないな」と感じると思う。沖縄に行ってわかったけど、これは絶対終わらない話だ、って。たぶん何も解決してないから、描いても描ききれないだろうって感覚はある。

今日 あの作品は本当に、「取り組まなきゃいけない」ってことをものすごく感じて描いた作品で、そういうエネルギーは確かにある作品だと思っているんですけどね。

—今日さんとしては、『cocoon』を描いたときと、今舞台化するにあたって一緒に制作をしているときとで何か感覚の違いはありますか？

今日 何だろう。これを描く前に担当さんと沖縄に取材に行ったときに思ったことは、自分がそこに高校生でいたとしたら「かわいそう」って言うてもらいたくないってことなんですね。そうじゃなくて、自分は死んでしまったことに、ただただムカついているんだよって気持ちに対して、「そうだよな、私もムカつくと思う」って言うてもらおうのが一番いいなと思ったんですよ。それだけは大事にしようと思って『cocoon』を描いたんですけど、それは今も変わらないですね。それと——死んじゃった人に重ね合わせるの申し訳ないですけど、自分も日本ムカつくことがあったり、自分の力でどうにもならない大きな力に負けそうになったりすることがあるんですけど、そこに対してムカつき続けることが大事かなと思ったんです。

藤田 ……今日さん、ハードコアやわ。

郁子 一人だけパンクバンドみたいなところがあって。

藤田 ちよつともう、怖いよ（笑）

今日 こんな話したら、いつもすごい怒ってるみたいになるけど（笑）でも、たとえばひめゆり平和祈念資料館に行くとな女の子の写真とプロフィールがバーツに貼ってあって、今の感覚からすると「この子たちはこんな子だったのに、かわいそう」ってなるんですけど、結構プロフィールがおかしい人もいて。「美少女である」と書いてある人もい

れば、「大病で気さくだった」とかすごくざっくりした人もいて。藤田 めちゃくちゃ人が死んでから、自立した子には長いプロフィールが書かれてるんだけど、写真もないし、誰も覚えてない子もいるんだと思うんだよね。「素朴だった」のひと言だったり。

今日 ほんと、自分もそっちょ側の人間だと思うから、悲しすぎる。藤田 どこで死んだのかもわからない子もいっぱいいて、あれも現実だよね。

今日 そこらへの厳しさを思うと、単に「かわいそう」じゃ済まされない問題がある。むしろ誰にも覚えられてなくてコメントが少ないこのほうがかわいそうなんじゃないかと思えるときもある。——今回の舞台でも死を描くことになると思うんですよ。これまでのマームの作品も死というテーマは扱われてきましたけど、戦争での死となると、どうしても少し違ってきますよね。

藤田 絶対違います。ただ、これは今日さんがあとがきに書いていたことでもあるんだけど、やっぱり僕は戦争を知らないっていう事実があるんですよ。その「知らない僕」と“事実”との距離ってこともちゃんと描かなきゃいけないと思うんですね。一方で、僕が友人を亡くしたときに思った喪失と、あの時期沖縄ですいで数の人が死んだという戦争での喪失とで何が変わるのかわからない疑問もある。その戦争っていうことについて考える上で、恥づいていう——吉田聡子さんです

けど、恥づいてキャラクターを原作にはないオリジナルのキャラクターとして一人置こうと思っています。だから、もろに戦争を描くだけじゃなくて、これまでも記憶を読み解くみたいなことはやってきたけど、「知らない僕」と“事実”との復讐になっていくんじゃないかとは思ってますね。

今日 藤田さんをお願いしたいって話は結構前からあったんですけど、去年7月に「マームと誰かさん、まずは「観に来てもらえませんか」とお願いをしたら、郁子さんが観に来てくれたんですよ。

藤田 だから「誰かさん」のときはめっちゃ緊張してました。観にき